

厚別の

農業

皆さんはご存知でしょうか。今は住宅街となっている厚別区が、開拓の苦難を乗り越え、豊かな農業・酪農地帯となり農業王国であった歴史があることを。

今月は、厚別の農業の歴史と現在も農業を営んでいる方を紹介します。

[写真：昭和25年ころの稲の刈り取り作業（現在の厚別高等学校前）]

農業のはじまり

厚別の開拓は、明治十六年に河西由造ら信州信濃（現在の長野県）からの一行八戸が入植したのが始まりと言われています。

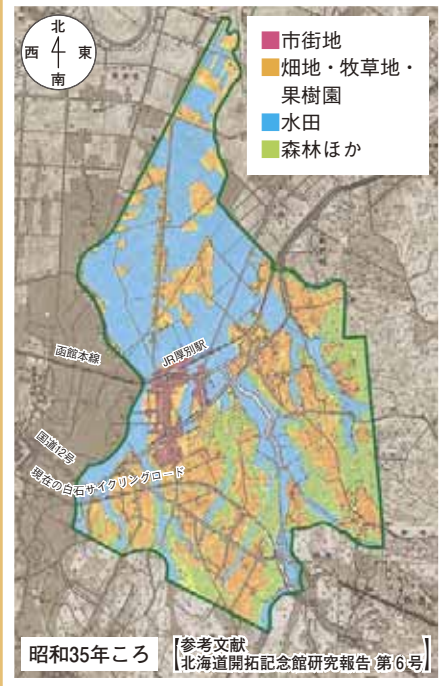
当時の厚別は、小高いところは森林とクマイザサに覆われ、低地はヨシが一面に生える湿地帯でした。一行は、現在のJR厚別駅付近の土地に入植し、この未開の地を大変な苦勞をしながら切り開き、田畑の開墾に成功しました。

苦難の歴史

各地に入植者が増え、開拓が進められました。すべてが順調ではありませんでした。米が収穫できるまでは、白石のレンガ工場で働くなどとしており、明治三十一年の水害では水田が大水でそっくり浮き上がって、そのまま隣の水田の上に乗るなど苦闘の連続でした。

厚別川と野津幌川の間地域は、農耕には適さない泥炭の低湿地帯なので、造田のため排水溝（現在の山本川）の造成を行うなど、各地で大変な苦勞があったと言われています。

農業王国だったころの厚別区



農業地帯としての発展

水田耕作が広がるにつれて、農業用水の必要量を確保するのが難しくなり、昭和三年には、苦難の工事を経て、周囲約四キロメートル、貯水量一七〇万立方メートルのため池が造られました。実り豊かな水田を願い「瑞穂の池」写真左」と名づけられ、現在でもその姿を見ることが出来ます。また、山本地区は、水害や



現在の瑞穂の池
所在地：江別市西野幌

戦前に使用していた農作業道具



開墾に使用した笹刈鎌
(明治～戦前)



開墾に使用した島田鉞
(明治～戦前)



ドロオイムシという稲の害虫をとるために使用した舟形網
(大正～戦前)



集乳缶
(大正～戦前)

すべて厚別区の農業者が寄贈したものです

【北海道開拓記念館所蔵】

